Métier de la philosophie clinique

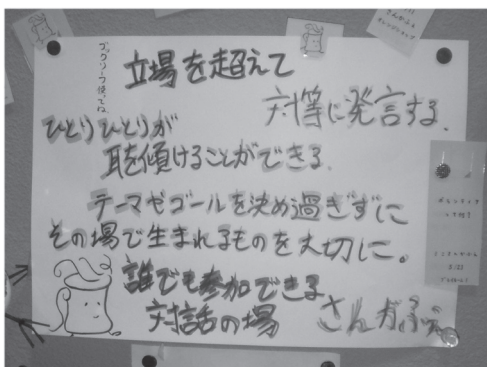
臨床哲学のメチエ

臨床の知のネットワークのために　vol.18 2012 春号

特集

さんかふぇを振り返って

在住外国人との語り合いカフェ

であいとものづくり
―ALS 春の和歌山合宿を通して

臨床哲学のメチエ

臨床の知のネットワークのために　Vol.18 2012 春号

現場で / と考える

臨床哲学独特の現場とのかかわり。今回はそれを「現場で / と考える」と表現してみました。今号は外国にルーツをもつ人々や ALS 患者とのかかわりに加え、中学校、高校、幼稚園などさまざまな現場で考えたことやその場の人々とともに考えたことが綴られています。じぶんが立っている / 訪ねていく現場とは、そこで考えるとはどういうことなのか。メチエのページをめくりながら、ともに考えてみませんか。　　　　（くすもと　ようこ）

Contents

特集１

さんかふぇを振り返って

さんかふぇとは、とよなか国際交流協会のスタッフと臨床哲学のメンバーが協力して設けている対話の場である。参加者にはボランティアなど協会に関わる人が多いが、制限はなく、誰でも参加できる。二時間の「さんかふぇ」が偶数月に、一時間の「ミニさんかふぇ」が奇数月に開かれている。経緯については『臨床哲学のメチエ』17 号、p.4 を参照。

３月 16 日、一年間続けてきた「さんかふぇ」の振り返りを兼ねて、川崎と金の両名が聞き取りを行なった。参加していただいたのは、協会職員から阿部和基さん、今井貴代子さん、平松マリアさん。さんかふぇに継続的に参加してくださっている、協会ボランティアのネルソン百合子さん。はじめ直接につながりはなかったものの、さんかふぇを通じてセンターに関わるようになられた岩崎宏さん。そこに我々を加えた８名で、さんかふぇのこれまでとこれからを自由に話し合った。

「さんかふぇ」のこれまでとこれから
—とよなか国際交流協会の方々と考える—

川崎　そんなに形式ばった仕方でやるつもりはないんですが、まず、一年やってきた「さんかふぇ」の印象に残った回とか、参加していてどう思った、というような、感想から聞かせていただければ。全部の回を振り返らなくてもいいので。

金　ざっくばらんに、「このときのこれがこう思った」とか、印象に残ったことから話していただいたら。色んなことが聞きたいです、ということで。いかがでしたか。

阿部　印象に残った回は、うーん、一回一回違ったから、どれが特別っていうわけじゃないんですけどね。あのときはこうだった、このときはこうだった、というような感じです。あのときは特別話が盛り上がったとか、あのときは失敗したとかじゃなくて、一回一回が多種多様で。今思ったら一年間も経ったのか、結構詰まっていたな、という感じですね。

■参加のしやすさ

マリア　私、最初は、何のテーマもなしで日本人も集まるのかな、ってすごくびっくりしたところもあったんです。私の経験では、ビラにしても、時間もあってテーマもあって当たり前。さんかふぇは、テーマなしの方が多かったんだけど、結局一時間、二時間も色んなテーマが出てきて話し合う。キャッチボールがちゃんとできる感じで。印象的というと、私が一番こわい思いをしたのは､映画のときに指摘されたとき。だけど、ああいう人もいるんだなって。

川崎　中之島の〔ラボカフェ〕*。

マリア　うん。あとは家庭で「今日はこんな話でしたよ」と報告していたら、主人も「参加したい！」と言って、〔参加後に〕今までにない集まりで、参加しやすいと言われた。やっぱり日本人もそういう風に感じるのかな、と。前も言ったように、フィリピンにいたときみたいな感じの場でした。初めて会った人でも、皆で話し合える。日本ではそんなにあんまりない。

岩崎　フィリピンでは結構ある？

マリア　よくある。普通。例えばネルソンさんの家で、誕生日会をしますって言ったら、誘われた人だけが来るんじゃなくて、プラス四、五人くらいついて来るから。ほんとに知らない人が話題に入ってくる。日本でもこういうことできるんだな、って思ったんですね。

阿部　さっき言った、回によって違うというのもあるんですけど、さんかふぇを始めて、去年の４月は、始めたっていうので関心があったり、デザイン５* で皆が協力しなきゃ、何かしたい、という思いで集まってくれたんですけど、さんかふぇはあまり目標を定めていなかったので、そういう人の期待を裏切ったというか、別にそういう場でもなくて。さんかふぇを設けるにあたっての事務局の意図みたいなものも結構関連していると思うんですね、一年の流れって。４月から始まって、最初は人数が多くて、三回目くらいまで二十人くらい来ていたんですけど、だんだん少なくなって、今やあまり広く告知をしていない。今どういう感じかというと、来てもいいし来なくてもいい。その代わり、来た人の中で自由にしゃべりましょうと。テーマも設定していないし、目標も設定していませんと。それが誰でも来られるといういいところでもあったり、その人の知らない面を見られるといういいところでもあったりするけれど、形の上で言ったら、参加する人数が集まりにくいというところもあったりして、その二つのバランスを取るのが難しい。

あとひとつ思ったのが、マリアさんの話にもあったんですけど、日本でもこういうことするんだな、っていうので。ブラジルに行ってきて *、日本では人対人で話すことがほんとに少ないな、って。あんまりしゃべっちゃいけないな、ただの挨拶程度なんだって。「元気？」「元気だよ」って、それくらいで。人と人との関わりがすごく薄くて、個人のプライバシーが強くて、壁が強くてっていう風に、すごく感じたんですね。で、それをぶち破るための「訓練」って言ったらおかしいですけど、それがさんかふぇの場でもあったんじゃないかなと思って。途中からは、人が集まらなくてもこういう場を続けることが重要なのかなという思いで、一カ月に一回定期的にやっていたんですけどね。なので、僕がこのさんかふぇで見たいのは、どれだけ人数が集まっているかとか、どれだけ有意義な話がされたとか、人がつながったとかじゃないものなのかな、他にもっといいことってないのかな、と思っています。

川崎　「ないのかな」というのは、あるだろうというか、見つかっている？　それ以外のいいことというのは。

阿部　やっぱり語り合いをするっていう感覚ですよね。あそこ〔C.C. カフェ〕* で〔2月に〕やったとき、皆で円になっていたら、すごく珍しがられていたじゃないですか。真ん中を横切るのをすごく躊躇されたり。それって一つの珍しがられる現象で、普通じゃないっていうことじゃないですか。それを普通にするっていうのはすごいことだと思うんですね。「ああいう語られる場があるのか！」って。そういう語られる場がないくらい、ちゃんと人と話してないのかなと思いますね。親身な友達とか家族とだったら話し合うけど、あまり関係ない人とか、仕事場とか、利害関係のある人とそんなに無駄な話はしないじゃないですか。そういう〔日本には〕ない機会のある場、あとはどんなささいな動機でも参加することのできる……。ある意味で参加しやすく

て、ある意味で参加しにくい場ではあるんですけどね。

岩崎　その「ある意味」っていうのは？

振り返りの様子

阿部　ある意味で参加しやすいというのは岩崎さんのことだと思うんですよ。参加していただいているし、さんかふぇを好んでいただいているし。でもそういう人がいるってことは逆に、参加しにくい人もいるんだと思うんですね。例えば利害目的でしか行動できない人、すごく忙しい人とか、「来てね」って言ったら「行かなきゃ！」と思っちゃう人とか。行っても〔さんかふぇは〕目的がないから、「何なんだ！」と思っちゃう人とか。そういうバランスが難しい。でも、いいかなって（笑）。両者が満足する場はないだろうし。

ネルソン　さっき阿部さんも言っていたんですけど、人にたくさん来てもらうことを目的にするのか、少ない人数でも必ず毎月来てくれる人がいるような場所にするのか。どっちかに決めなくてもいいのかもしれないですけど、どうしてもたくさんの人に来てもらおうとなると、逆にそれによって来にくくなる人も出てくるのかなという気がするんですよ。そうは言ってもやっぱり、何かを始めて継続するんだったらなるべくたくさんの人に知ってもらって来てもらうことも、それによって会が発展していくっていうのも分かるんですけど、その一方で、少ない人数かもしれないけれど、毎回とか、何回か回数が空いても思いだして来てくれる人がいる場所っていうのもすごく大事なのかなって。だからそこがすごく難しいというか……。

　私が日曜日の朝にここでやっている日本語の活動＊も、きっちり勉強を教える場じゃないから、数にばらつきがあるんですよ。お出かけしますとか、お料理教室しますとか、企画をすれば人はたくさん集まるかもしれないけど、毎回違った人がたくさん来るより、二人とか三人必ず毎回来てくれる人がいるんですよ。二、三年ぶりにふらっと帰って来てくれる人が一人ときどきいたりとかして。すごく少ない人数かもししれないですけど、定期的に来てくれていたり、しばらく来られなくなっても、気にかけてくれて何かの折に戻ってきてくれる人がいるとか。私は個人的には日曜日にここでやっている「にちよう がちゃがちゃだん」っていう活動は後者の方にしたいって思っているから……さんかふぇはどうなのかなあって。

■さんかふぇと、自由に発言すること

川崎　哲学カフェはさんかふぇとはテーマが決まっているという違いがあって。哲学カフェ自体、ふだんの社会で言うと変な場所だと思うんですけど、そういう場ももちろんあっていいと思うし。で、さんかふぇってもっと変な場というか（笑）、テーマす

らないので。自由に発言する場っていうのは哲学カフェと共通していると思うんですけど、さらにもっと価値観とかが出てくる場所というのはさんかふぇの方が強いのかな、と参加していて思いますね。

ネルソン　マリアさんがお話しされたように、色んなことを言う人がいたりっていうので、私も正直自分がさんかふぇに出ていて、あれっと思う意見とか出てくることがあるんですよね。でも、この場は何か答えを導く場でもないし、その人の考えを変える場でもないし、その人を否定する場でもないっていう……私がわりとすぐに、その人がおかしいなと思ったら、そこを議論しようとしてしまうんですよ。それを抑えるのが大変なときは正直ありますよね（笑）。

　そのへんが自分にもいい練習になるなあと思いながら……「あっ成長しなきゃ」って思ったりしながら。でもどうなんでしょうね、仮にその発言によってその場にいる誰かが不快な思いをしたというぐらいのレベルであれば、まあ私がそこまで腹が立ったことは今のところはないですけど、もしそういうときになったら、何でも発言していいですよっていうのを履き違える人がいたらどうなるのかな、というのはときどき心配になることはありますよ。

マリア　ここで年配の人たちと一緒にやったとき〔9 月のミニさんかふぇ〕、すごく面白かった。あの日私一番ほっとしたな。

阿部　ほっとした？

マリア　ほっとしたっていうか、投げられた問題について自由にバーンって投げ返せたのがすごく……。

ネルソン　ありましたね、うん。

マリア　何ていうのかな、やっぱり人ってそれぞれの思いで、それぞれの考えでいたわけですよね。自分の思っていること、考えていることは出して、それで実際私もそこで納得できないことがあって、発言したのも…。

金　それはいつの？

阿部　あれはミニさんかふぇなんですけど、国際交流の話をしたんですね。参加していた全員がここで活動している人だったので、自ずと国際交流の話になって、全員が自分の考えを述べたんだけど、やっぱり全然違う。もう正反対って言っていい。そのときは二極に分かれて。僕もあのときほっとしました。結構いいバトルができて、最後にはよくまとまった……のかな？　まとまった気がして。すごく気持ちよかった。なんでだろうと思ったら、マリアさんのやった〔中之島での〕上映会のときも、あとは哲学カフェでも危ういなと思うときがあるんですよ。〔11 月の哲学カフェで〕「男らしさ、女らしさ〔って？〕」で話し合ったときなんですけど、テーマが決まっていて、誰でも自由に発言したらいいという…さっきネルソンさんも、誰でも自由に発言できるっていうのを履き違える人がいるのがこわいって言っていたんですけど、その履き違えるっていうのはその場にいる人を傷つけてしまうようなことではないのかなと思っていて。例えば一つのテーマについて全員が話していたら、その人がいないものだと思って発言しちゃうから、女性がいるのにあたかも女性がいないかのように発

言してしまうっていうことが起こりうるのかなと思って、簡単に言えば危うさを感じていて。さんかふぇは哲学カフェと違ってテーマがない分、人と人との会話の中で発展していくから、人が必ず目の前にいて、その人と話しているわけじゃないですか。だからバトルも話が逸れずに投げ合いでできるのかなと（笑）。さんかふぇでも危うい場っていうか、自由に発言することを履き違える人はやっぱりいるとは思うんですけれど…。哲学カフェとの違いは、人とのコミュニケーション、人との間が深いなっていう風に感じますね。

■「聴いてもらう」から「聴く」へ

岩崎　哲学カフェってここだけじゃなくて違うところも行きましたけど、テーマから逸れたことはあんまり〔言わないし〕、自分個人はこう思うっていうのはあまり〔言わない〕。テーマ決めずにしゃべることもあるけどそんなに〔ない〕。逆に〔さんかふぇは〕テーマを決めてないから参加する方にとっては不安定なのかなっていうか、けっこう大変な部分もあるのかな、という。

金　そう感じられたことがあったんですか。

岩崎　決めてくれた方が前もって「ああ、これについて話できるな」とか。テーマを決めていないと、例えば参加している人で、ものすごく話す人がいると、極端な話、その人の時間になるから。自分も話したいのに。テーマを決めてないと色んな広がりになるから、ついていくのが大変だったり、自分も聴かないとダメだから。テーマを決めていたら、関心のあることないことって〔分けられる〕。基本的に、空間というかそういう場を共有しようというのがさんかふぇのコンセプトだったような気がするんですけど。それがいいという人もいるだろうし、一方的に、独演会じゃないけど、しゃべりたい人もいるし。

金　岩崎さんは自分自身をどちらだと思いますか。しゃべりたい方か聴きたい方か。

岩崎　最初オレンジショップ＊でやったときは緊張もしていたし、どんな人が来るんだろうっていうことで、一回目はけっこうしゃべりましたけど、慣れてくると、自分の言うことも大事だけど、初めての人も来るから、やっぱり聴いて自分の意見も言った方がいいっていうので、わりと割合というか、変わってきましたね。

金　緊張しているとおしゃべりになると。

岩崎　しゃべると、聴いてもらっていると安心するじゃないですか。だから、一回目のときは聴いてもらう方が多かったです。慣れてくると、さんかふぇの場合だと年配の人も若い人も来られるし、それを聴くということも大事だなあという。で、言ってもらえると、ああ、こういうことを考えているんだ、とか、こういう問題があるんだ、とか。

３月のさんかふぇの様子

■テーマを決めないことについて

ネルソン　なんか、テーマを決めずに会話が途切れないのがすごいですよね。そのことにいつもびっくりするんですよ。途切れないどころか時間が足りないくらいだからすごいって。例えば友達同士で会ってごはんを食べながらしゃべるとかだったら、わざわざ今日この話しようとか決めずに会うじゃないですか、特別話したい大事なことがあったらこれ話そうかなって考えますけど。会って、そのときの会話から始まって、話が長くなったり話が変わったりして時間が経っていくじゃないですか。でも、顔とか名前は知っていてもさんかふぇ以外で一緒になることがほとんどない人たちと集まって、一時間とか二時間、誰からともなく話がずっと続いていて、沈黙の時間がないっていうのは、よっぽどこの人たちしゃべりたいんだろうなって（笑）。でもそれができるのは信頼感というか安心感なのかなって思うんですよ。

さっき、行き過ぎた発言があるとちょっと嫌だみたいな話をしたんですけど、正直それが続くとちょっともう来るのやめようかなと思うときは今までときどきあったんです。でも、結局そこで嫌な思いをしても、後日職員さんとかに「こないだのさんかふぇこんなんだったんですよ」みたいな話をして、そこですっきりするみたいなことができるって分かっているから来られるのかなって。だから私にとっては、この協会に関わっている人たちが来るさんかふぇというのが、安心して来られる要素の一つかなあと。他でやっている見ず知らずの人ばかりが集まるさんかふぇみたいなものに私は行ったことがないので分からないですけど。……顔が見られるから話しやすいっていうのは〔ありますね〕。だから、別にテーマがなくても私は話せるかなって。テーマが邪魔っていうわけじゃないですけど、「何もないところから一時間とか二時間話せる私たち、すごい！」って私は自分で勝手に思っているんです。

川崎　哲学カフェと比べると、さんかふぇはデザイン５の一部として始まって、大阪大学でやることもあったけど、途中からはずっとここでやるようになったし、場所との結びつきが強いというか、参加する人もそうだし、話題も協会に関連することになることが多いし。で、話が途切れないというのはあるんですけど、さらにすごいなと思うのは、別に全員がしゃべらないといけないわけでもないのに途切れないということですね。僕はあまりしゃべらない方なので、一度もしゃべらないさんかふぇもたぶん四回くらいあるんですけど、それでも続いていくし。しゃべらなくても居ていいという気持ちをもてる数少ない場所というか。仮に初対面の人ばかりの場に行ったとしたら「しゃべらないと」という気持ちになるだろうけど、さんかふぇだとあまりならないなあという感じですね。

岩崎　しゃべりたくないというか、しゃべるのが得手じゃない人にとっては、しゃべらないといけない集まりに行くとそれが苦痛にもなり得るから。そうかといって、どこかに行きたい気持ちもあるわけで（笑）。しゃべらなくても、別に来てもいいよって

いう。コンパなんかに行くと、しゃべって場を盛り上げてっていうのがあるけど、そういうのが嫌いだという人も実際いるし、でもそういう人もどこかに参加したいというか、グループに属したいっていうのもあるし。なるほど。

阿部　僕も哲学カフェに初めて参加したときって、三回目ぐらいまでは勝負だったんですね。「なんか言わなきゃ！」って（笑）。同じボランティアも出ていて、他の人も発言しているから、「ああ、あいつ発言しよった、すげえ。僕もなんか言わなきゃ」みたいな。知的な場で、賢いこと言わなきゃって、すごく思っていた。大学生のときだったんですけど。川崎さんの言うとおりに、さんかふぇではそれがないのは、ただ僕は何回も参加して慣れているのか、それとも知的な発言じゃなくてもなんでも言っていいのか、言わなくてもいいと思わされる何かがあるのか、だと思います。そういう意味で、居ていい場所っていうのが一つの居場所なのかなっていう。

あとひとつ、共通点を見つけられる場所なのかなっていうのもあって、さんかふぇの価値観っていうんですか。一回さんかふぇをやったときに、どうしても僕とミーティングをしなければならない大学生がいて、でも僕はさんかふぇがあるからできない、もししたいならさんかふぇ待って、さんかふぇ来て！って〔言って〕、出てもらって。あまり積極的じゃないような子だったからどうかなと思ったんですけど、最後まで話を聞いて、最後には共通点を発言してくれて。何と言ってくれたかって、「面白かったです」って。「こういう場がない、珍しい場というのでも面白いです」っていうのもあったんですけど、「全然年齢が違う人と同じような考え方があって、同じように話せるとは思わなかったです」っていうのがあって。そこが今よくやっている、なんとかカフェとかなんとかサロンとの違いなのかなと思います。マリアさんも外国人が何人か集まったときに、やっぱり皆同じような経験しているんだなっていうことをおっしゃっていたので。少ない意見の集まれる場でもあるのかなと思っていますね。

金　哲学カフェはやっぱり僕はしゃべりやすいと思ったことはあまりないですね、正直なところ。哲学カフェは今のところ、阿部さんの思いに近いなっていう気がして。哲学カフェとさんかふぇとが全然違うなって思うのは、いつの間にかしゃべっている感が哲学カフェにはないんですよ、僕の中では。さんかふぇはいつの間にかしゃべっていて。自分、何を言っているんだろうなと思いながらしゃべっていることもよくあるので。別にそれでもいい、皆が聞いてくれているっていうのがありがたいし。友達との会話もポンポン続いたり冗談を言い合ったりして楽しく時間は過ぎるんですけど、そういうときとはやっぱりしゃべることが違うし、しゃべり方も違う。自分の結構悩んでいることとか、ひっかかっていることとか、そういうものの周りから勝手にしゃべっているというのは、友達との会話でもほとんどないし、そういうことをいつの間にかしゃべらされているという経験

が、僕がさんかふぇに来たいとずっと思っている理由の一つなのかな。

■肯定と否定

岩崎　肯定もしないし、否定もしゃべっていてされないので、そのへんが面白いかなとは。

川崎　そうですね。さっき阿部さんが共通点の話をしたんですけど、いつも共通点が見つかって「やった！」みたいな感じで終わるかというと、そういうときもあるし、お互い違う意見で、どちらかが勝ちとか、どちらかが正しいということで終わるんじゃなくって、「違うね」というので終わることもある。否定し合って終わっているわけではなくて、お互いがお互いの意見を言って、聴いて、終わっている。聴いてはいるんだけど、自分の呑みこめないことを肯定して帰らないといけないというわけではないし。でも、聴くは聴いたと。そういうことが起きるというのはわりと珍しいというか、地味にすごいことかなという気がするんですけどね。

岩崎　意見は違うけど、最後まで聴いてもらっているわけだし、それは肯定されているのかなっていう気がしなくもないです。途中で中断して、「そんなのダメだよ」みたいな感じになるわけじゃないし。

川崎　そうですね。

２月のさんかふぇの様子

■支えと継続

阿部　僕の中でね、一回だけあんまり気持ちよく終われなかったときがあって。話が抽象的でうやむやになって、否定も肯定もできないような話がずっと続いて終わってしまったときがあって。前回〔２月のさんかふぇ〕なんですけど。どっちつかずな発言が続いて。「人生ってこういうものじゃないですか」「でも僕はこう思う」「そういうこともあるんですよね」っていうような発言が二人の間でずっと続いて、「どういうことですか」って聞いても、抽象的な〔答えしかなくて〕…。

今井　何がテーマだったんですか。

阿部　何の話だったか思い出せないくらい。

今井　たぶんネルソンさんが言っていたのは、そのときのことがすごくしんどかったって〔ネルソンさんは都合のためすでに退席〕。それはみなさんと同じしんどさか分かりませんけど、そのあとネルソンさんは私にすごくしんどかったって言ってきました。さんかふぇが二時間だけの時間ではなく、その後とかその周辺に協会っていうのがあって、活動がずっと続いていくっていうふうに捉えるのであれば、誰か職員あるいはここに来た人がその話を継続してするっていうので気分がよくなったり、落とし所があるんだったらいいけれども、さんかふぇの二時間でしんどくなった、気分が悪くなったっていう人がいた場合に、どうしたらいいんだろうっていう。

岩崎　しんどいっていうか…分からないので、言ってもらわないと。こっちが妄想と

いうか、イメージを膨らませていくんだけど、どこまで膨らませていいか、僕個人的にはね。もっとはっきりバーンと言って…
マリア　そうそう、遠回りの言い方をするから、何が言いたいんやって。「例えば」とか、その「例えば」も全然遠いところから引っぱってくるから。で、ネルソンさんが一回〔抽象的な話をしても仕方がないと〕言ったけど変わらなかったから……。

でも、そういう人もどんどん参加してほしいなって。一回だけでは本人も気がつかないだろうし。あの人は引っぱりたいなって私思ったんです。何回も参加してもらって。多分本人も自分で上手に言えない。私もそうなんだけど。だけどさんかふぇに参加して、やり方を学んで……。
川崎　さんかふぇだとそれができるっていうか。例えば哲学カフェだとテーマがあるから、バッと集まってバッと解散するので、そのときに上手くいくかいかないかで、上手くいかなかったらそれで終わっちゃうんだけど、さんかふぇだと今言われたみたいに、そのときはあまり上手くいかない感じだったとしても、また次来てもらえばいいじゃないっていうことになるんですよね。今感動していました、「そうか！」って（笑）。
今井　それは思いますね。ここに来ている人を見ると、なんだかんだ言って、協会の他の事業には来ないけれども、そういう人とか〔も参加できるから〕。……懐の広さはありますよね。これ〔さんかふぇ〕は何回もあるんだっていうのでやっているので、一回限りだったら、やっぱり目標を作りたくなるし、皆が気持ちよく帰ってほしいとか思うと、ある程度こういう層には来てほしくないなとか、爆弾発言したらどうしようとか、いろいろ思うんですけど、〔さんかふぇでは〕よく分かってくださる方もいるし、継続してやるので、その中で人が育っていくという側面はあるのかな。それを受け入れる側も、どんな人であれ。だから、しんどかったって言う人が、しんどくなるのは仕方ないところもあるけれども、そういうのをどれだけケアしたり、減らしたりしながら、新しい人を迎え入れられる体制を作れるかっていうのを私は考えてしまうんですけど……そういうことを考えてくれる人が増えていったらすごいことなのかなと思って。
岩崎　例えば、今回のはきつかった、楽しかったって言ってくれるから、人で支え合っているから、いいんじゃないでしょうか。
今井　逆に言えばその人の支えがなかったら上手くいかないかもしれない。
岩崎　そうそう、一人で抱えて…。
マリア　だからここなんですよ、たぶん。さんかふぇが心の支えじゃないでしょうか。
今井　でも、新しい人が来るのを、怖がったり排除したりするのはしたくないんですよね。でも一人ひとりが傷つかないようにもしたい。そういう場を作りたいなと。やっぱり怖がるじゃないですか。こういう発言をする人は来てほしくないとか。それを怖がったらだめなんだけど、じゃあそういう発言があったときに自分は次にどうひとこと言うんだろうって、鍛えられますよね。

傷つく人がいっぱいいたとして、じゃあ私は何ができるのかということを考えさせられますよね、最初から排除するのではないやり方で。

阿部　今の話、テーマがないということにも関係すると思っていて、テーマがないからまず「この場ってどんな場？」と考えることができる。それは今〔もそうだし〕、終わってからも、今日どうだった〔かと考えることができる〕。それが何回も続いて大きな変化を生む。例えばさっき言われていた、何回も参加するうちに聞くことに徹するようになったと…。やっぱり前回参加していた二人も自分で分かっていると思うんです、「言えなかった」、「違うねん、もっとこういうことが言いたかった」って。だからもう一回参加してくれると思うんです。そのときはまた違う姿勢で来ると思うので、それはそれでいいと思うんですね。ただ、やっぱりあんまり独占されるというか話をされても困るので、コミュニティボール＊だけじゃないコーディネータも必要なのかな。

■コミュニティボール

金　阿部さんが、コミュニティボールを使いたいときと、使わないでおこうかなという身振りをされるときがあるのを見ていて、なんでだろうと思っていたんですが、その理由が聞けた気がします。

阿部　使わなかったときありましたっけ？

川崎　途中くらいから「今日は使わんとこうかな」って言ってから、やっぱり使ったことが二回か三回かあったような気がします。

マリア　でも、〔誰かがボールを〕持っている〔間はその人の言うことを聴くという〕そのルールがあって、上手に聴けたりするときもあるんですよね。初めて参加した人も、時間を与えられるから。

阿部　多分、僕もそんなに意識していないんですけども、使わんとこうかなっていうのは、当初さんかふぇの辛いところはテーマがない〔ということで〕、この場について皆が配慮してくれるという優しさがあるんですけど、自分も配慮しないといけないと。それで皆が皆緊張することがあるんですよね。あまり緊張しすぎたら発言しにくいんじゃないかとか、コミュニティボール持っているのが嫌じゃないかとか。〔ボールを〕ポンと前に投げるということもあったりするので。だからもうちょっと和らげたいという気持ちがあったんですね。でもあまり和らげすぎたら、ここは皆の場で、公共的なものに近いので、それが破られるときがあるから、今はやっぱりコミュニティボールは必要だし。最初の「さんかふぇ始めます」っていうひとことだけでも必要だし。前回は僕最初あんまり喋らなかったんです。あえてだらだら始めたんですが、それだとあまり皆の場っていうのを作れなかったんですね。

マリア　コミュニティボールの大切さ、私がこれ飾ろうかって〔4 月のさんかふぇを開いた〕オレンジショップから持って帰ってきたのは、やっぱりそれぞれの思いを語りながら巻いていたから。じゃあ一年間このコミュニティボールだけかな、次何作る

のかなって考えてたりもしました。皆が作れるもの。

阿部　またなにか作るのもいいですよね。だって作るということにかなり意味があって、使うだけっていうのはね、結構〔関わる人が〕限られますよね。

マリア　そうです。だから皆が関われるようなもの。そして後に残って、一年目のさんかふぇはこれ、二年目のさんかふぇは、というように、このときの気持ちはこうだったなって、思い出させてくれる。

コミュニティボールを持つマリアさん

阿部　存在感はないんですけど、やっぱり大切。皆がちゃんと話を聴くというのは大切。何か新しいもの、作りませんか？

■「集い場」としてのさんかふぇ

今井　ちっちゃいときって皆学校から帰ってきて、皆で遊んだりとかしました？学校から帰ってきて、ここに集まったら皆遊んでるから皆で遊んで。そんなんがしたい。マリアさんが言っていた、人がよく集まる場所。

川崎　大人になると〔そういう場所が〕無い。

今井　テーマとか、何かがないと人が集まらないし、その話題でしか話してはいけない場所。人と出会うのでさえもお金払うじゃないですか。話したい人がいるんだけど、それはいま商売になっていますよね。

岩崎　〔さんかふぇが〕デザイン５の、集い場であればいいですよね。

阿部　〔「集い場」は〕デザイン５のテーマになってますね。

今井　でもだからといって個人的なプライベートの出会いというか、その話だけではない、そういう人達が話せる場所って無いですよね。私は職員だから、ここにいるとたくさんの人と出会うじゃないですか。だからわりと私の中でまだ満足しているかもしれません、そういう環境、人との出会いがまだ豊かにある環境にいるから。

阿部　目的がないと集まらないですよね。休憩時間に話すことのほうが楽しい。

マリア　すごく決められるんですよね。今また思い出したのが、日本の生活って箱に入れられたみたいな感じ。周りに合わせないと、自分だけ目立っちゃうと打たれる。でもフィリピンではいきいきした生活ができる、誰とでも仲良くできる。誰にでも話せる。日本だったら、やっぱり顔を見て人を選んで、話が変わってくるんです。

■来年度に向けて

川崎　コミュニティボールを作ろうかみたいな、次回のことも考えるような話になったのでよかったです。来年度のさんかふぇ。

マリア　今年できなかったことは、多言語のさんかふぇ。

今井　多言語、楽しそうですね。

阿部　できると思うんですよ。多言語といっても、英語だけじゃなくても、アイヌ語でもできそう。

金　日本語ネイティブの人が結局こういう場では日本語でしゃべっている以上は強くなっちゃうというか、それはどこかでちゃんと逆転させたいなとは思います。

マリア　ほっとできる場所をもっともっと作りたいなと思いますね。

阿部　向う〔ブラジル〕でも、全然通じるんですよ。ちゃんと目を見て、信頼を持って、自分が日本語しかしゃべれないよってことを言ったらむっちゃ通じるんですけど、あきらめられるんですよね、たまに。そのときにすごく悲しくて。なんで通じ合えるのに諦めるんやって。だから全然いけると思うんですよ。ゆっくり話すとか、ジェスチャー使うとか、通じ合うとか。

金　皆が非ネイティブの言語で話す、とか。英語だったらたぶん、少なくともここにいる人は非ネイティブ。

マリア　私、離れていても、さんかふぇには参加したいと思います。

今井　一年間で、さんかふぇというのができて、さんかふぇを好きになる人がちょっと増えてきて、嬉しいなと思うのと同時に、もっといろんな人が関わってくれたら嬉しいなと思う反面、こういう風な落ち着いた雰囲気とか信頼出来る雰囲気とか、だれかが傷ついたときにフォローできる体制というのが、ずっと残っていけるといいなと思います。いろんな人に来て欲しいけど、でも大事なものは残す。人が増えるというのは、今関わっていない一人のひとが加わっていくという感覚ですね。一対一で関わっていく感覚。誰でもよくてバッと広がるというよりは。例えば岩崎さんみたいな人が来年もう一人増えたら嬉しいな、みたいな。

マリア　まあ、これが「さんか増え」ですよね。

今井　これ使ってくださいね（笑）。

金　今日は長時間お付き合いいただき、ありがとうございました。

（3月16日、とよなか国際交流センター、コミュニケーション・コモンスペースにて）

注

以下、とよなか国際交流協会に関しては協会のHP（www.a-atoms.info）と公式facebook（www.facebook.com/toyonaka.kokuryu）を参考にさせていただいた。

* 中之島のラボカフェ：10月21日にアートエリアB1で行われた映像カフェ「日本在住フィリピン人の声を聴く」（ゲスト：平松マリア、カフェマスター：本間直樹）のこと。6月のさんかふぇで協会の広報活動を考える中で提案された。マリアさんが以前に作成し、フィリピンで放送された映像を観た後、参加者がマリアさんに質問や意見を投げかけた。日本在住の外国人について厳しい意見を述べる参加者もおり、マリアさんがここで「ああいう人もいるんだな」と語っているのはそのことを指す。

* デザイン5：「みんなでデザインする『協会（組織）・活動（人びと）・センター（公共空間）の5年』」の略称。2011年4月から5年間、協会がとよなか国際交流センターの指定管理者となったことを受けて始まった活動で、さんかふぇは「プロジェ

クト広報」、「プロジェクト公共空間」と並ぶデザイン５のひとつの柱である。
* ブラジルに行ってきて：阿部さんはこの振り返りが行われる前日までの約３週間、ブラジルで活動している NPO に参加しておられた。
*C.C. カフェ：事務局横のスペースのこと (p.2 のタイトル背景がその写真)。2012 年１月から、「外国人も日本人もぷらっと立ち寄ってほっとできる」カフェが毎月一回のペースで開かれている。
* 日本語の活動：協会では複数の日本語交流活動が行われている。ここでは後述されるように、ネルソンさんの参加する「にちよう がちゃがちゃだん」を指す。
* オレンジショップ：大阪大学コミュニケーション・デザインセンターの活動スペース。豊中キャンパス基礎工学部 I 棟１階にある。
* コミュニティボール：対話の参加者が円になって話しながら巻いた毛糸をボールにしたもの。詳しくは『臨床哲学のメチエ』17 号、p.18 を参照。さんかふぇでは４月に作成して以来、発言したい人がボールを持って話すというスタイルが続いている。

（構成：川崎唯史・金和永）

とよなか国際交流センターの掲示板。コミュニティボールの作り方（中央上）や、毎回のさんかふぇで話題になったこと（右側の小さい紙）が掲示されている。

特集２
在住外国人との語り合いカフェ

文化庁委託事業「わたしは日本で生きています」の一環として、箕面市国際交流協会と大阪大学コミュニケーション・デザインセンター主催のもと「在住外国人との語り合いカフェ」* が、2011 年度に計 5 回開催されました。さらに、2 月 13 日と 14 日の二日間にわたってネオ・ソクラティック・ダイアローグが行われました。

和やかな雰囲気のもと、お茶とお菓子を片手に、在日コリアン、留学生、仕事で日本にやってきた人、日本人と結婚した外国人、外国人と結婚した日本人……まさに様々な人たちが、語り合いました。話し合われたテーマは、結婚、名前、故郷、最期をむかえたい場所、などなど。

本誌でお届けできるのは、「在住外国人との語り合いカフェ」のほんの一端だけかもしれません。もしメチエを手に取られた読者のなかに、あの場所で生まれたものが、ほんの少しでも息を吹き返すことがあるとすれば幸いです。

*「在住外国人との語り合いカフェ」については、『臨床哲学のメチエ』17 号、pp.3-4 に川崎による報告がある。

対話の場所でにじみだすもの

辻明典

ちょっとだけ覗いてみよう。最初はそんな軽い気持ちしかもっていなかった。ふらっと足を運んだだけだったのに、私はその温かな雰囲気に一瞬にして引き込まれてしまったのだ。私はこの時間が大好きだった。時が経つのを忘れるとはこのことなのかもしれない。ここで私が得た感覚は、子どものころに日が暮れるまで遊んだ頃のものと似ているのかもしれない。そして初めて参加したその日の帰り道には、もう一度行きたいと思っていたのだ。

もちろん、何人もの外国にルーツをもつ方々と、ゆっくりとそして複数回にわたって語り合うなど、生まれて初めての体験だ。そしてこの居心地のよい雰囲気。お茶を片手にともに言葉を交わし、その傍らで子どもたちがはしゃぎ声をあげている。大人がじっくりと話しているすぐそばで、幼子たちが戯れているのだ。それ自体がもちろん新鮮なのだけれども…いや、ちょっと待てよ？　ここまで書いて思い出した。大人たちが真面目な話をしているのを見ながら子どもたちが戯れているなんて、よくあった光景ではないのか？　私の実家は商店街の一角で商いをしていたので、大人たちが仕事について真面目な話をしているすぐ横で遊んでいたものだ。私に懐旧の情をかき立てる光景が、そこにはあった。

私が埋もれていた日常は、くたびれたと言わんばかりの木製の机の上に、無造作においてある湿った画用紙の上にしかなかった。ここで出会った人たちは、その古びた机に趣を与えてくれる。部屋には除湿器を入れてくれたのかもしれない。からっとした空気が画用紙から湿り気を取り除いてくれた。前よりもずっと手触りがいい。とにかく心地よい手触りだ。

この場所で私が見つけたのは、語る人の内側と外側からにじみでる感情の手触りだ。例えば初対面の方へと向ける挨拶。私の生活に組み込まれてしまった挨拶、特に初対面の方にかける挨拶は、定式化された言葉と軽い会釈の組み合わせでしかない。私を取り巻く日常において、初対面となる人との身体的接触をする機会は皆無であると言っても過言ではない。初めて覗いた語り合いカフェで、私は同じテーブルの人から握手を求められた 。いつもの私なら軽く頭を下げ、味も素っ気もない言葉で自分自身を説明するだろう。それは私にとってはほんの些細な日常の一コマで、忘れ去られる過去となるはずだった。だが握手という身体的表現が、その一シーンを全く別のものへと変えたのだ。挨拶という日常的な営み。たった一つそれだけを取り出したとしても、ここにいる人たちから見れば、まったく違った世界が広がっている！　握手に不慣れな私は、一瞬だけ躊躇してから手を差しだす。その一瞬のためらいは、握手という不慣れな行為に対して私が抱いている感情に起因している。

にじみだす感情。感情は語られた言葉からも、語ろうとする沈黙からもにじみでる。

感情は咽喉の奥からのみ発せられるのではない。緩もうとする口元からもにじみだし、ぎゅっと握った掌からもにじみだす。感情がにじみだす、またはにじみだそうとする一瞬一瞬を垣間見るたびに、私は目の前の人から語られた言葉や、その表現に、あっという間に引き込まれてしまう。にじみでる感情は、なぜか人間くさい。

その場所からにじみでるような人間くささが、私を惹きつける。そしてこの場所で語られた言葉には、ここに居合わせた人たちの感情が託されていた。しかもそれは、小刻みに波うつ振動なのだ。さざ波のように揺れ動く振動は、私たちの身体に刺激を与えてくれるらしい。語られた言葉は感情をはらみながら小刻みに揺れ、だれかの口元を緩ませたり、閉じられた口を開かせたり、ぐっと上体を前のめりにさせたりするのだ 。あそこで生まれた言葉は、まるで人肌のような温かさでぬくぬくとしている。最初の頃の私は、それにおそるおそる指先だけで触れていた。そう、最初は指先だけで触れていた。その温かさは指先から私の体中を駆け巡った。今度は手のひらで触れてみた。その次は握手をした！

この場所に満ちようとする感情の波。その波はどこか温かい。そしてその揺れ幅は大小さまざまだ。その中には私が常日頃接している波とよく似ていて、一見すると見間違えてしまいそうなものがあるのだ。だが似ているように見えて、少しだけ違う。似ているものの間にも、ほんの少しのずれがある。それはほんのわずかなずれなのだ。それは、ここにいる人たちとじっくりと語り合わなければおそらく見過ごしていたであるはずの、ほんのわずかな差異である。その差異が垣間見えかけたとき、私の過ぎ去るはずの日常は一瞬立ち止まらざるを得ない。私たちの間にはほんのわずかな差異が横たわっていて、それはいとも簡単に見過ごされてしまうのだ。気にも留めずに過ぎ去っていく私の日常に、立ち止まる時間が与えられた。私が気にも留めずに置いてきぼりにしてきたもの。これまで私が気にも留めることがなかったことが、すぐ目の前で話している人からはこのように見えるのか！　わずかな差異が垣間見えたそのとき、じわりとにじみでるものがある。そのじわりとにじみでるものに触れかけたとき、私からも何かがにじみだす。そしていつの間にか私は、語り合いカフェが生みだす雰囲気に引き込まれていた。

ここまで思いのままにつらつらと綴ってしまった。生硬な拙文には、ただただ恥じ入るばかりである。語り合いカフェで生まれたものを、なんとか表現できないものかと、筆を置いた後も思案を重ねている。

そして最後になりましたが、語り合いカフェでお会いできたすべての方々に、心よりお礼申し上げます。あのような和やかな雰囲気の中でじっくりと語り合う時間を分かち合えたことは、忘れがたい経験となりました。

（つじ　あきのり）

人との出合い、問いとの出合い

服部佐和子

1．対話の場の選択

2010 年、箕面市国際交流協会との共催で「在住外国人との語り合いカフェ」が 4 回に渡って開かれた。そのうち 3 回目（10 月 15 日）と 4 回目（11 月 5 日）は哲学カフェのような対話の場——この時は敢えて「哲学カフェ」ではなく「語り合いカフェ」という表現が用いられた——であった。3, 4 回目の語り合いは盛況で「哲学カフェ」として見ればそれぞれ興味深いものであったと思う。ただ、この語り合いは「在住外国人との」という目的のもとに設けられたものであると同時に、その当事者とその他の人々——もちろん誰が真に「当事者」であるのかは大いに議論の余地があると思われるが、今回は暫定的にこのような表現を用いることをお許し頂きたい——が入り混じる場であった。

対話の場が最初から意図をもって設定されていたためであろうか、少なくとも私は違和感を覚えたことを記憶している。『臨床哲学のメチエ vol.17』（pp.5-8）の中で、金和永さんが対話において感じられた「もどかしさ」について書かれているが、この時の私はその対話の場への期待と実際の進行具合の間——あるいは当事者と聞き手との間——の中間地点に身を置くもどかしさに耐え得る十分な用意が無かったのかも知れない。

当事者はテーマの提案者としてその場で自らを他に開いて話すことを求められるであろうし、その用意もあるであろう。しかし哲学カフェの自由に意見を交えるという形式においては、当事者であろうと何であろうと結局のところその場の一参加者に還元されてしまい——もちろん、これは哲学カフェの魅力の一つでもあろうが——、当然のことながら関心事について集中的に話し合うということは困難であった。たとえ当事者の意見が取り上げられたとしても、掘り下げる前に話題が変わるとき、或いは発言の流れが「問題の解決」へ傾くとき、このような場合もやはり——確かに重要な手続きではあるが——問題の奥深いところには迫ることができなかった。

また、当事者は具体的な体験をある程度一般化して「皆にも分かるように」提示することが求められることになるが、問題共有のための糸口を未だ発見できない聞き手（受け手）側は、実際の問題の背景などが見えないまま当事者に面し、分からないままに意見を述べることの居心地の悪さを感じざるを得ない 。そして言うまでも無く、その命題が自らと密接に関係していることを意識しつつ、単に自己主張するのではなく、他者の声を容れようと敢えて人前に提示することは、当事者にとっては相当なエネルギーを要するものであろう。ここで、たとえ当事者の発言を掬い上げて、その確認作業に入ったとしても、話が噛み合わない場では、それは自らを開いて語ろうとする者の声を制限するものにも容易になり得るだろう。そのようなわけで、私は対話後

に「色んな意見が出て興味深かった」などと楽観的には感想を述べられず、ただ「聴かなければ」と思ったものである。

対話の場の安全性、ということが言われる。上の哲学カフェの形式を用いた対話は、問いと当事者、またその扱い方について大いに考えさせられる経験であった。ただ対話の場を設ければ良い、というだけではなく、その対話の目的や問題の状態、そして人を見極めて場の形式を選択すること（あるいは対話を重ねる中で形式を変えていくこと）の必要性、その場への責任を改めて感じさせられた瞬間である。

2．人を通じて

それでは、とにかく当事者に耳を傾けて学ぼうではないか。そしてより話しやすい場に変えて、じっくり話してみようではないか。2011 年から 2012 年にかけて開かれた「語り合いカフェ」では、少人数のグループを作り、外国にルーツを持つゲストを囲み、そのメンバー全員でテーマを決めて自由に話し合う、という形がとられた。この形式では、メンバーの日常的な何気ないお喋りも含め、普段から抱いている疑問や意見を述べたり､それらに応答したりと、より個別的な関係に配慮し、リラックスした雰囲気の中で進行していった。そうこうするうちに、当然ながら、より人が見えてくる。そして、人が見えてき始めたその時に漸く、当初話し合おうとしていたテーマも少しずつ見えてきたように私は思う。

痛感したのは、外国にルーツを持つそれぞれの方が、日本での生活において、私たち聴き手の想像を超える不安、困難、葛藤などを潜り抜けて来られたのであろう、ということである。お話しして下さった方のお一人が「私が声を上げるのは、そうしないと伝わらないから。そして自分と同じような境遇にある人々のため」と仰っていたのが印象的であった。日本に長年暮らされ、一見すっかりこちらの生活に馴染んでいらっしゃるようであるからこそ、その思いが強く迫ってきた。

しかしながら、これは実際の事後的なものからやや先取りした表現である。今思い返せば、この段階では私自身は聴き手としてこの対話の場には未だ受動的な姿勢で臨んでいたのではないかと思う。2012 年 2 月に箕面市国際交流協会のスタッフと一緒に NSD（ネオ・ソクラティック・ダイアローグ)の場を囲む機会に恵まれたのだが、命題をメンバー個人の具体的経験から考察する NSD の過程における傾聴と応答、発言という一連の作業によって、対話において能動、受動の二つの姿勢をとることとなり、関わっている問題に対する自らの姿勢の変化を感じ取るという経験をさせて頂いた。このことに関して、NSD という枠内において、あるテーマを巡って参加者の経験を具体例として提出し合い、また一つ一つの言葉の概念も綿密に確認して行くことで、ある出来事や言葉を媒介として参加者の経験が交差する、ということが一つ考えられるのではないかと思う。それは、意見の共有、メンバー全員の理解の後にのみ議論が進められるというルールのもとにあって､より鮮明に感ぜられたのかも知れない。

テーマや命題が先にあり、それについて考える時、そのテーマの範疇の関係者に私たちは積極的に出会うようになる。しかし、私たち自身が問いそのものに出合うことは予想以上に複雑ではないだろうか。問いはそれだけを見ていたのでは何も生じず、しかし、なかなか一筋縄にはいかない個別的な人との出会いを通じて思いがけない仕方で現れる。既定のテーマをひとまず措いて、個々人との出会いを通じ、テーマに改めて出合い直すという経験が、実際に生きた人と、生きた対話の場を作るために重要になってくるのではないかと思われたのである。

それにしても、ここまで書いてきて気付けば、私は対話を巡る抽象的な命題と個別的な出合いとについて語るつもりが、自らの表現自体が極めて抽象的になってしまい、ある種の自己矛盾を感じ反省している次第である。そのことをお詫びすると同時に、何よりも、このような気付きと今後の課題、その契機を与えて下さった臨床哲学、「対話コンポ班」のメンバー、箕面市国際交流協会の皆さまに心より感謝申し上げる。

（はっとり　さわこ）

和歌山の ALS 患者さんとの幾度もの交流を通して、学生がものづくりなど様々なことを学んでいる ITP-SL（詳細は本特集末尾 p.30 に掲載）の活動。今までに立正大学や湘南工科大学、立命館大学などから多くの学生が参加しており、大阪大学の倫理学・臨床哲学研究室では、昨年度から数人が関わっています。

今回は、3 月の 12 日から 13 日にかけて行なわれた春合宿について。

おもに ALS 患者さんと学生の交流や、学生が協力しながら作った患者さんのためのマッサージ機「ほぐすんです」の贈呈を中心に、立正大、湘南工科大、大阪大の様々な学生からの視点を織り交ぜつつ、活動の様子をお届けします。

特集 3
であいとものづくり
—ALS 春の和歌山合宿を通して—

春、和歌山で「会う」

楠本瑶子

3月12日から13日にかけて、和歌山で春のALS合宿が行われました。今回は立正大学、湘南工科大学、大阪大学を中心に20人ほどが参加しました。ここでは簡単に、合宿での対面交流と対話を中心にご紹介したいと思います。

12日
ALS患者さんとの交流
/ 和歌浦アートキューブ

■コミュニティボールづくり

今回は夏合宿をふまえ、いろいろな大学から参加するということもあり、話しやすい場をつくろうと合宿の最初にコミュニティボール*をつくることになりました。

5つの質問 (1.呼ばれたい名前 2.この合宿とのかかわり 3.元気になるのはどんなとき?/元気の源は? 4.あなたのこだわりは? 5.昨日はどんな一日を過ごした?/4月からは何をする?/最近ハマったことは?/あなたの趣味は?) に答えながら、患者さんの久住さんや林さん、そのご家族、ヘルパーさんも含めてその場にいるひと全員で糸を巻いていきました。

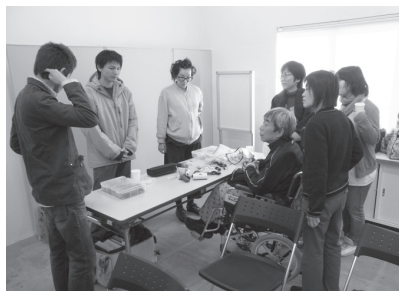
■「ほぐすんです」贈呈

その後、林さんのためのマッサージ機「ほぐすんです」の贈呈へ。使い方やマニュアルなど、林さんの要望にこたえながら、ご本人自身が快く使えるようにデザインされたものを説明していきます。

■スイッチ、いろいろ

それと同時並行で、久住さんがピアサポートの際に工夫してつくっておられるさまざまなスイッチを見せていただきました。そのひとの得意な身体の動きに合わせてデザインすることや素材や色で楽しむことも重視してスイッチをつくっていらっしゃる様子がうかがえました。

■元気の源は?

今度はふたたび全員で輪になって、「元気の源」について話し合います。久住さんは元気の源は人間のあらゆる「欲」と仰り

「『欲』と『良く』は読みも同じ。あらゆることをいまより良くしていこうということが元気の源。」と話されました。また、林さんは私たち学生が会いに来ることや、ひとと会うことがとても生活のハリになるとお答えくださいました。

13日
コミュニティボールをつかった対話
/和歌山ふれ愛センター

二日目はうってかわって、学生を中心に「仕事って?」をテーマに3時間ほど対話をしました。

■仕事ってなんだろう?

前半は「仕事は生きていくために必要な手段」や「アルバイトと仕事との違い」、「仕事と自由」「仕事と責任」「だれのために仕事をするのか」「仕事を選ぶこと」など、仕事にまつわるさまざまなことに考えがめぐらされました。

■一日目の交流を振り返って

また後半は、和歌山一日目を振り返りながら、久住さんや林さんからうかがったことと「仕事」との関係について話し合いました。「欲」と「良く」が仕事につながっていくことや、「ひととあってともに作業をすることがひょっとして仕事なのではないか」などが挙がり、「ほぐすんです」を数人で一緒に制作したことも、ひょっとして仕事だったのではないかと、いままでの作業を振り返るひと場面もみられました。

■和中さんのお見舞いへ

毎年合宿に参加してくださっていた和中さんが体調を崩されて入院されているということで、合宿参加者で病院までお見舞いにうかがいました。

病院では和中さん用の「ほぐすんです」の説明や、いままでにこの合宿に参加してきたひとのメッセージカードをお渡ししました。

二日をかけて、様々な人に会うことができました。一日目に聴いた「人と会うこと」と「よく」のことを、もっと考えていきたいと思わされた和歌山での経験でした。

（くすもと　ようこ）

注
*コミュニティボール:「こどもの哲学で用いられる、ハワイ発祥のツール。授業に参加する者は車座になって座り、用意された質問に答えながら毛糸を巻く。全員が質問に答え終わったら、進行役は毛糸をまとめてボールを完成させる。」『臨床哲学のメチエ』17号、p.18を参照のこと。

behblues

■デンジャラスもしも、の巻

わたしつねにすでに母さんの死を、抜きにはなにも考えられない。

そのようなわたし、“ALS 患者さん ” の舩後さんの講演会を、スカイプ越しにきいていた。昨年 11 月のこと。

「ALS は不治の病である」「医師は、『なんとかなるんではないか』という患者さんの儚い希望を砕くような説明を繰り返さざるをえない」ということばがでていた。それはたんなる病気の説明ではなくて、舩後さんが病院で、診察券出して少し待たされてお金払ったりする場所で言われた具体的なことば、生きていくうえで自分に内包せざるをえなくなった肉感的なことば、の再現だとおもった。それは何度か繰り返された。

講演会のおしまいのころ、質疑応答で会場のだれかが尋ねた。

「失礼だとは思いますが、もしも ALS が治ったとしたら何がしたいですか？」

この疑問文は、わたしの体を硬くした。

感情としてたぶん、「失礼」ということばは遠くなさそうだった。でも質問者の言った「失礼」とは遠そうだった。今、“ALS 患者さん ” の舩後さんに対して発された、ということは関係しているけれど、わたし「舩後さんに対して失礼だ」と憤っているわけではない。その質問者は存在を意識してさえいなかっただろうわたしにとって「失礼」的な不快なのだ。なにが。

それからずっと、考えていて思い当たった。

「もしも」が。「もしも」がわたしを悲しくさせた。

可能性が 0% のなにかを語るときに付ける「もしも」は、だれに対しても平等で、魔法みたいだ。でもそれは、いつでも “ 良い魔法 ” ではない。

「もしもお母さんが生きていたら〜でしょうね。」は、母ともわたしとも接点のない人間でも、やすやすと口にする構文。死んだ人間が、生きている可能性は 0%。わたしの死んだ母さんが、生きている可能性は 0%。それは確かに、その「もしも」発話者にとっても、わたしにとっても、等しく 0%。でも、わたしは、わたしのほうは、すでにその「もしも」は何万回も何億回も、考えてきている。わたしの耐えたすべての「もしも」を、誰かの口にした「もしも」は無自覚に剥ぎ取っていく。0 × X=0、左辺の X を気に留めずとも、右辺の 0 をスタート地点にして語り出すことができるという、どうしようもなさが悔しかった。

舩後さんの X を気にしなくても発することのできる「もしも」は、わたしにとっておなじみの「失礼」なやつだって感じて、だから不快で悲しかったのだ。

「もしも」はしょっちゅう素敵な魔法としてもはたらくけれど、その正体は危険なやつだ、って、これが舩後さんの講演会のおかげで、今のところわたしがいちばん考えたこと。

■きらいな毛玉にやさしくなる時、の巻

わたしつねにすでに母さんの死を、抜きにはなにも考えられない。

そのようなわたし、今年の ITP-SL 春合宿に参加した。和歌山県で 1 泊 2 日。

この世には、コミュニティボールというものがある。参加者ひとりひとりが、質問に答えながら芯に毛糸を巻いていく、結束バンドで束ねられる、輪になっているところをはさみで切るとボールになる、その後それを持つことは発言権を持つことになる、という毛玉だ。

わたしは。そもそも毛糸というものが。突然なぞの物体に束ねられる感じが。“コミュニティボール”という名前はすごくうさんくさいのに強力な (「わたしこんな毛玉作りに参加したくない」って言ったら、その後永久に“コミュニティ”から追放される気がしてしまう) ところが。ボールを使って対話をすると発言権がないときなんだか自分のからだごと声を持て余す感じでいつも仄かに寂しくなるのが。好きではない。だから基本的に“コミュニティボール”がきらい。

しかし合宿の一日目、コミュニティボールはまた作られる。あーあ。

でも、今回のこの毛玉、そんなにきらいじゃなかった。

理由でいちばん大きいのは、田坂せんせいってひとの存在。まず、名前を“コミュニケーションボール”と間違っていて、そのままなんとなく周りのひとにも伝わった。「(うさんくさいが) 強力」な名前を、へっぽこな感じの名前にしてくれた。それから、完成してボールとして使いはじめてから、ボールが手元になくても、いい声でたくさん相づちやあいの手を入れていた。とりわけ衝撃的だったのが、誰かが発言したあと沈黙がおとずれたとき、「だれか、受けとってあげて ?」「受けとってくれる人、いませんか ?」とかけていた声。

たしかにかつてのコミュニティボールを使った経験のなかでだって、たとえば「パスしてください」という言い方はされていたことがあった。けど、それはわたしのなかで、ボールを持っている人に対しての、「ボールをほしがっている人に向けて投げてください」以上の意味にきこえてなかった。でも、そっか、ボールは、話したいひとがただ入手するのではなく、その前に話したかったひとが話したものを、まず受けとって、それから話しはじめるんや！って気がついて、びっくりした。びっくりしてから、おもろいやんって思った。毛玉をだ。

もうひとつの理由は、毛糸を巻く作業のとき、存在している人間をやり過ごさなかったこと。今回の輪にははじめ、“ALS 患者さん”の久住さんが入っていて、そして輪から一歩下がったところにヘルパーさんが座っていた。毛糸は、ヘルパーさんにも手渡された。

ああ、ここまで書いて、ひとつめの、「田坂せんせいの存在」っていうのも、この「やり過ごさない」ってことかも、って思いあたる。

もしかして、毛玉を好きになるかもしれない予感に満ちる。

（behblues）

ALS患者との出会いと「ほぐすんです」の製作

白石駿也（立正大学）・田原航平（湘南工科大学）

ALSの方に向けた製品を作るということで、まずは使用者へのヒアリングを行うことになった。初めてお二方に会うことになったのは、湘南工科大学、立正大学、大阪大学の学生が集う夏合宿でのことだった。製品作りのためにヒアリングを行うということは、その時が初めてのことだったのでうまくいくか私は不安だった。しかし、実際にお二方にあったとき、そんな不安はごく些細なものになった。そのときまで、私はALSの患者がどういう人なのかあまり分かっていなかったといえるだろう。知識として話せないということをわかってはいたが、実際にその人にヒアリングをするとなると、どうすればよいのか困惑した。とりあえず、どんなものが希望なのか、事前に用意していた質問をいくつか声に出してしゃべってみる。しかし、こちらからは理解してもらえたのかどうか、それ以前に聞こえているのかどうかのフィードバックも得られない。お二方のご家族は手馴れた様子で文字盤を使い林さん、和中さんから意見を聞いている。目線とまばたきでコミュニケーションをとると聞いてはいたが、実際に見てみるとそんな一文であらわせるほど容易ではなさそうであった。慣れているはずのご家族でも何度か訂正を繰り返しているくらいなのだ。私たちがコミュニケーションをとるとなったら、相当困難なことだろうと想像した。それと同時に、これからの製品作りが一筋縄ではいかないだろうという予感もしていた。

（しらいし　しゅんや）

「ほぐすんです」とはALS患者用マッサージ補助具のことで、2010年に考案されたものです。そもそもALSとは筋萎縮性側索硬化症のことで、筋肉の萎縮と筋力低下が起きてしまいます。進行スピードが早く、数年で全身が麻痺し、自分の力で動けなくなる人がほとんどです。そのALS患者のリハビリの手段の一つとして、神経原生の筋萎縮に効果的なマッサージ、低周

波での刺激があります。患者さんは筋肉を動かしていない状態で長時間寝たきりになるので、患者さんにとって辛い状態にあります。そのことから、このマッサージ補助具が考案されたのだと思っています。

経緯としては、この２年間で、試作１

号機～４号機まで多くの協力、助言、改良を重ねて作られてきました。１号機では必要な機能をつけ、２号機ではデザイン、スイッチの位置等を修正し、３号機ではケースの形を修正し、軽く簡易にするために分離させ、そして現在の４号機に至ります。

私は、今まで先輩方がやってきたことを引き継ぐ形で、今年度この「ほぐすんです４号機」の製作を担当しました。

私がこの活動に参加した期間は、９月～３月の半年間です。最初、何をやっているか全く分かっていないときにいきなり和歌山のALS患者さんのところに行くことになりました。このときは軽い気持ちで２日間行きましたが、前半は「何故こんなことをやっているんだろう」、「何故自分は参加しなければならなかったのか、大勢で行く意味はないんじゃないか」、このようなことを考え、活動に関わったことを後悔しかけました。しかし、最後にALS患者さん２人と話していくうちに、発病してからの気持ち、実態、不安、悲しみや辛さを聞いて、次第に自分もALS患者さんの身になって考えはじめました。とても苦しい気持ちになり、同時に「少しでも力になりたい、この活動を真剣にやらなければならないんだ」という気持ちになりました。この瞬間から、私は本気で４号機の製作を行うことを決めました。

今までの３号機から改良を求められたのは、シンプル、分かりやすさ、安全性の３つに特に重点をおいて作成しろ、ということでした。もちろん自分一人では難しいので、活動に関わっている後輩達の力を借りながら、製作に挑みました。一番苦労したのは、やはり内部の回路とプログラムです。内部は非常に複雑であり、少しでも位置を間違えると、正しく機能しないので、集中力を使います。なんとか完成し、３月に納品したときにはとても喜んでもらえました。半年前は何も出来なかった自分が役に立ったことを実感しました。短い期間でしたが真面目に取り組んでよかったです。

今回高評価を頂きましたが、これで終わりではありません。これからも後輩達がさらなる改良をしてくれることを期待しています。

（たはら　こうへい）

ものづくりから気づくこと
―誰が製作するのか―

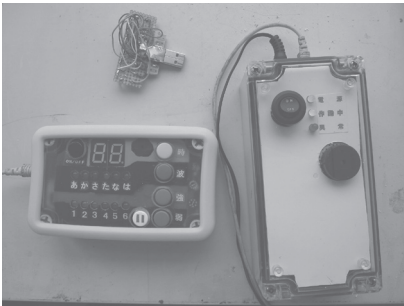
始関千鶴（立正大学）

関西夏・春合宿、ものづくりの活動など、大学を超えたITP-SLの活動に関わることで、様々なことを学ぶ機会に恵まれた。思い返してみれば、湘南工科大学や横浜国立大学との共同製作である、ものづくりの活動を通しての関わりが大きな比重を占めている。それは夏・春合宿に向け、何かしらの製品の製作に関わり、完成させていることからもうかがえる。今回はこれまでの活動を振り返りつつ、ものづくりの活動を中心に考えていきたいと思う。

湘南工科大学との共同製作に初めて関わったのは2010年のことである。2011年の活動は足が遠のいていたものの、2012年から再度参加させていただくこととなった。筆者が製作に関わった作品は4つ。訪問の家へ納品した「グロッケン」と「スヌーズレン」、ALS(筋萎縮性側索硬化症)の患者さんへ納品した「ほぐすんです」(新旧)である。

これらの製作を通して、以下3つのことを考える機会が多くあった。まず、製品は誰が製作するのかということである。一般に販売されているものを想像しながら考えると、使用者と製作者の関係は、製作者が作り使用者が使用するという関係のほうが想定しやすいのではないだろうか。しかし、製作者が想定している製品の完成図が、本当に使用者にマッチしているとはいえないのだ。筆者は、製品は製作者と使用者が共に製作するものであると考える。ものをつくるにあたり、製作者にはものをつくる技術がある。しかし、ものをつくる技術だけでは使用者に適したものを作ることはできないのである。よりよいものをつくるためには、使用者の存在・意見が必要なのだ。その理由は以下の通りである。製作者だけで製作する場合には、使用者の使用感や使いやすさなどの追求をする際､製作者の想像の域を出ない。しかし、製作時に使用者が関わることにより、製作者の想像を超えた意見や提案が出ることがある。自身の想像を超えたものと出会うことで、より使用者に適した製品をつくることができるようになる。さらに、製作者自身が間違いに気づかされることもあるのだ。例えば、製作者側が便利になると思ってつけた機能が実際には使用にあたって邪魔になってしまうケース、分かりやすさを狙ってつけた説明が実際には混乱を招いてしまったケースなどがあげられる。

次に、文系学生として何ができるのかということである。湘南工科大学と立正大学の共同製作とはいっても、実際に機械部分を製作しているのは湘南工科大学の学生なのである。我々、立正大学の学生はどのようなことができるのだろうか、ということ

とが筆者自身の現在も続く課題のひとつである。まず、機械部分を触ることは不可能である。専門的な技術を必要とするものは専門家に任せるとする。そこで、我々のような専門外の人間だからこそできることを考えた。それは２つ考えられる。第１に、専門的な技術・知識を持っていないことを逆に活かし、使用者により近い視点に立って意見すること。その理由は、実際に使用する方が機械の専門家ではないからである。制作にあたっての打ち合わせ中や製品の説明の際、小さな単語や専門用語など、我々のような専門外の人間が聞いても分からない説明がある。しかし実際に使用するのは、機械に詳しくない方であるため、専門的な言葉を使わず如何に分かりやすい説明・取扱説明書ができるかが重要なのだ。使用者にとって分かりやすい説明をつくるにあたり、使用者に近く専門知識のない文系学生が意外な戦力となることが分かった。第２に、機械部分以外の製作 (「グロッケン」のスイッチ、「スヌーズレン」のディスク、「ほぐすんです」のカバー・取扱説明書など) への参加の可能性である。機械の部分以外であれば専門知識がなくても製作できるのではないか、ということが発端

なのだが、使用者の使用感や分かりやすさなどを考えることは機械部分と似ている。機械部分と同様に我々の想像するものは十分ではなく、課題は尽きないのが現状である。

最後に雰囲気づくりの重要性である。

機械部分・その他の部分に関わらず、ひとつの製品を制作するには使用者と製作者が共同で製作できる環境や雰囲気づくりが重要であると考える。それは、よいものをつくるという点において、何も言わないという状況こそがよいものをつくることの妨げとなると考えるからである。使用者に合ったよりよいものをつくるには、使用者と製作者が互いに意見を出し合う必要がある。互いに持つぼんやりとした理想をすり合わせ、目に見える形へとつくり上げなければならない。しかし実際には、使用者である方々は遠慮や気遣いから、十分に我々製作者に意見を伝えられていないように思える。また、学生同士でもどこまで口を出してよいのか測りかねている場面に遭遇する。このような状況から、相手のことを尊重しつつも自由に発言できる雰囲気作りをする必要と難しさを感じている。これは、ものづくりの現場だけでなく、哲学カフェや対話をはじめとした様々な場面にも、活かせるのではないだろうか。

使用者と製作者の関係について、「ほぐすんです」の製作を例に考えてみる。「ほぐすんです」の製作目的は、ALS 患者さん特有の身体の不快感を緩和することにある。この不快感は既存の製品 (マッサージ

器など) では解消されない。筋肉の疲れや痛み、あるいはコリの緩和やツボの刺激を目的として製作され売り出されている既存の多くの製品とは、使用目的が全く異なっているのである。そのため、明確な完成図が見えないままのスタートであった。試作機を製作し、患者さんにお試しいただき意見をうかがう、という一連の流れを繰り返しつくりあげてゆく。この繰り返しをすることで、製作者と使用者の持つぼんやりとした理想をすり合わせ、実際に使用するべき製品をつくりあげることができるのである。どんなに制作者の想像力が豊かでも、実際の使い心地が分かるのは患者さんご本人なのだ。使用者からのメッセージを正しく解釈し製作に役立てつくりあげることが、我々製作側の仕事なのだと考えている。

現在、このような状況で使用者と製作者との関係づくりの橋渡しとなってくださっているのが、久住純司さん (ALS 協会近畿ブロック技術ピアサポーター、以下 : 久住さん とする) である。久住さんは自身が ALS 患者でありながら、あわせて技術者でもある。つまり、使用者でありながら製作者でもあるのだ。製作にあたり厳しい意見をいただく時もあるが、我々がなかなか気が付かない使用者の現状を製作者目線で伝えていただける。非常にありがたいことである。少しの期間ではあるが、ものづくりや合宿に関わり、製作者と使用者が共同で製作することで生まれる製品の完成度の高さに驚いている。特に 2012 年 3 月に納品した「ほぐすんです」については、製作段階からの久住さんとの関わり方の変化や学生同士の新たな関わり方の可能性が見えた気がする。今までのようにただ製作者が製作し、後に使用者から意見を聞くだけでなく、リアルタイムでの使用者と製作者のやりとりをうまく活用する方法なども、まだまだ可能性はあるだろう。

このような機会に出会わせてくださった皆様、原稿執筆の機会をくださった皆様に深く感謝する。

（しせき　ちづる）

*ITP-SL

ITP-SL とは、IT プロジェクト・サービスラーニングの略。この ITP-SL では、IT を用いて ALS 当事者の方々と交流しながら、マッサージ器の製作による『福祉ものづくり』を通したサービスラーニングを行っている。プロジェクト発足の経緯、位置づけについては次の論文が詳しい。

「ALS 当事者との出会いからはじまるサービスラーニング—湘南工科大学・立命館大学・立正大学との連携による IT プロジェクト報告—」（湘南工科大学紀要 43(1), pp. 119-134, 2009-03-31）

http://ci.nii.ac.jp/naid/110007076427

考え、悩み、つながる瞬間
—吹田第三幼稚園での対話の試みから—

山本聖人

一昨年の秋から続けている、幼稚園でのボランティア実習。教職の単位合わせのつもりが、すっかり子供たちの虜になってしまった私は、3月のある日、園長先生のご厚意ですばらしい時間を持つことができました。幼稚園での哲学対話。今までも高校生や小学生とそうした時間を持ったことはありましたが、今回の相手は5歳児。どんな言葉が出てくるだろう、という期待と、全く話ができなかったらどうしよう、という不安の中で始まった試みでした。

先生が「今日はきりんさん（年長組のこと）の皆に、あることをしてもらいます。こういうこと、したことないんじゃないかな」という言葉で、子供たちは一斉にわくわくし始めます。先生が子供たちと円をつくり、僕もその輪の中に入れてもらいます。コミュニティボールは背中の後ろに隠していたのですが、既に子供たちからは「あれ何？」といった声が聞こえます。

「今日はね、きよひとくんとゆっくり話してみようと思います。ずっと一緒に遊んでもらってきたけど、こうやって皆で一緒に話すことってなかったでしょ？じゃあ、きよひとくんよろしく！」

…ポカーンとしている子供たち。視線がこちらに移ります。

「今日は火曜日だけど、皆と一緒にお話がしたくて来てしまいました。せっかくだから、こんなの持ってきました！」

色鮮やかな毛糸玉を見た子供たちは、にわかに騒ぎ出します。

「なにそれー！」

「毛糸やー！」

「変なの！」

「ちょうだい！」

「これはね、使う時に2つルールがあります。ひとつは、これを持っている人が話します。そして、持っている人の話を聞きましょう。大丈夫かい？…じゃあこれ使って…そうやな、好きな食べ物言っていこうか！言いたい人！」

皆、コミュニティボールを食い入るように見つめています。しばらくして、何人かのやんちゃな子供たちが、手を挙げます。それにつられて、徐々に他の子供たちも手を挙げるようになります。

「牛乳！」

「カレー！」

「麻婆豆腐！」

麻婆豆腐を知っているのか、というツッコミはさておき、10人くらいに回ってから、ルールが浸透したのを確認して、本題に入ります。今日のテーマは、ボールを使って、ボールについて話すこと。このコミュニティボールという正体不明なものを、5歳児はどう捉えるのだろう。緊張、どきどき、わくわくの瞬間です。

「使い方わかったかな？じゃあ、ちょっと皆考えてほしいんやけど、これに名前つけたいと思うんだ。どんな名前が良いだろう？」

再びポカーンとする子供たち。しまった。問いかけが急すぎた。

「これみてどう思う？色とか、形とか、思ったこと何でも良いから教えてほしいな。」

先ほどのやんちゃ集団の一人が、手を挙げます。

「えっとな、あんな、んと、…あんな、えっとな、…ふわふわ。」

「どの辺がふわふわ？」

「あんな、えっとな、この辺。」

「色はどう？」

「きれい！」

「どの色がきれい？」

こんなやり取りが何人かと続いて、少しずつ名前も出てきます。

「ふわふわボール！」

「マイクボール！」

「虹色だからレインボーボール！」

どの辺が？どうして？一つ一つに少しずつ突っ込んでみる。細かく話してくれる子もいれば、わからなくてただ考えこんでいる子もいる。もっとこの子が考えていることを知りたい、そう思っても言葉が出てこない。思考を広げられるような質問ができない。これめちゃくちゃ難しい。一人一人の発言に、いちいち考えこんでしまう。ああ、しーんとなってしまった。何か返さないと。余裕が、なくなる。

そうした焦りは、子供たちに伝わっていきます。こちらが揺らぐと、子供たちも揺らぐ。急に下を向いて話を聞かなくなる子や、寝転がる子が出てきます。

そんな中、先生が助け船を出してくださいます。今までの話を軽く引き合いに出しながら、まだ話していない子供たちにボールを投げかけます。先生の言葉って不思議です。一人と話しているのに、なぜか言葉はその場の皆に向かって発されているみたいで、皆が聞き入ります。再び廻りだす場の空気。

話は続きましたが、名前は決まらなかったので、次に来たときにまた教えてもらうことにして、とりあえず話し合いは終了。最後に先生が「今日きよひとくんとお話してどうだった？」と問いかけてくださいました。

「ボールの名前考えれて良かった！」

「ボールが楽しかった！」

「きよひとくんとお話できて良かった！」

「僕と話せて〜」という感想と、ボール自体の感想は半々といったところでした。

若干空気を読んでくれた気がしないでもないのですが、楽しんでもらえたようで良かった。最後に本間さんの提案で、持っていったボールをクラスに置いていくことにして、時間は終わりました。

ボールを持っている子供たちは、必ずしもよくしゃべったわけではなく、ボールを持って黙りこむ子供もいました。しかしその沈黙の時間は、その子がボールを見て思ったことを、必死に言葉にしようとして、できなくてまた考えて、という非常に濃い時間であるように感じました。卒園前にその姿が見られただけでも、僕は嬉しい。

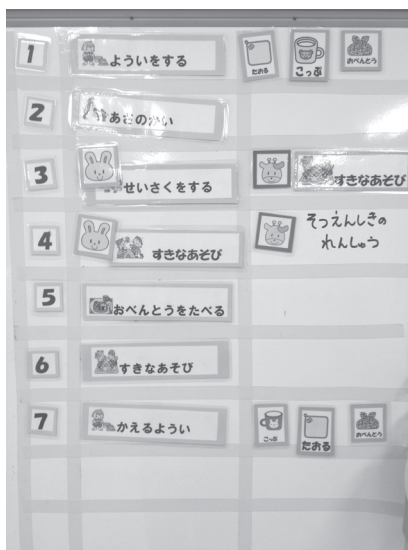
その後の自由時間、何人かの子供たちがコミュニティボールで遊んでいました。何でもいいから言葉を話して投げる、というルールのもとで遊んでいたのですが、子供たちが非常に面白い変化を見せた、と先生が教えて下さいました。最初はただ興奮して叫びながら投げていただけなのが、15分くらいすると会話になり始めたそうです。

「プリン食べたいー！」
「高いからだめー！」
というように。

「言葉を発して投げる」という、一見縛りのきついルールを自ら受け入れ、それを用いて人と関わるということ、それが会話になったこと、しかもそれを彼らは面白いものとして捉えました。決して言葉を重ねて、話を深めたわけではない。それは探究としては不要なつながりかもしれないし、彼らの人間関係にとってどんな意味を持つのかもわからない。でも､彼らはその瞬間､確かにつながりました。言葉を介さないやり取りが言葉のやり取りにつながり、場が変容していく、その瞬間に子供たちの間で何が起こったのか。残り半分となった大学生活で、またひとつ考えたいことが増えてしまいました。来年度に子供たちからどんな言葉が発されるか、今から楽しみです。

最後に。
ボールの名前は「レインボーマイク」になったそうです。

（やまもと　きよひと）

コレクション中川②

「ある戦いの記録」から皮肉屋との対話

中川雅道

内側からの声

運転手さんに挨拶して、バスから降りる。これから大学に向かい、数名の人たちの話を聞きにいく。急峻な瀬川の坂が立ちはだかり、足を止めた。瞬間、その日に起こってしまったことが、まだ胸の中に燻っていることに気づいた。バイクが後ろから追い抜いていく。小学生がだらだらと正面から歩み寄ってきて、通り過ぎ、背景に消えていく。

「みんなの意見が痛かった」。

この言葉を、学校の保健室で聞いた。授業で、生徒たちが出したテーマで話し合った直後のことだった。わざとなのか偶然なのか、そのテーマはその子ひとりを責めるものだったのだ。そのことに、授業が終わるまで気づくことができなかった。そしてなんと、その日の授業は活発に意見が出て、良い議論だったと思っていたのだ。気づけなかった後悔が、胸の中に溜まってゆく。

目の前で泣いている人。

「みんなの意見が痛かった」。

ちりちりと、ストーブが鳴いている。口から声が出てこない。胸の内で複数の声が谺する。——お前がやりたかった対話とはこんなものなのか。—– 違う！おれの力不足なんだ。ほんとうは哲学はもっと深淵にふれるような何かなんだ。—– 現に授業は純粋な悪意に支配され、利用されているじゃないか。こんな授業やめてしまうほうがいいだろう ?—– おれが未熟なだけなんだ。やりかたを変えれば、やり方さえ変えれば。—– どこにそのやり方が?

「嫌なことがあったら、授業の途中でも保健室に行ってくれればいいから、無理する必要はないから」と乾いた声が出る。何かについて話すことは、切実な問題を生む。どのような声であっても、人を深く傷つける可能性がある。何度うまくやろうとしても、避けることができない事態だ。重責から生まれる内面の声は執拗に響き続ける。

思い直して、坂を登る。

インタビューの始まり

えっと、それじゃあインタビューを始めます。質問は、いくつかあります。洛星高校の授業に関わるようになった経緯と、関わってから自分に変化があったかを聞きたいと思います。話す順番は適当で！

なぜだろうか、さっきまで響いていた声がいったん収まる。

洛星高校の土曜日の講座で、哲学の授業を行っているメンバーの話を聞きたく

なって、カメラを構えている。自分と似たことを続けている人たちは、授業に向かう中でどんなことを考えているのだろう。そのことが、とにかく聞きたかった。

桂さんとは昨年度、何度かいっしょに授業をした。確か、桂さんを授業へと誘ったのは自分だったような気がする。「誘われたら断らない」という主義を貫いて洛星高校を訪れた。—– 今年度、継続して洛星高校に行ってみて、どんなことが変わりましたか。——臨哲の研究室が嫌いになりましたぁ。

人数はめっちゃ多いのにキホン孤独。けっこう毎回の授業、問題あるんですけど、臨床哲学のメーリングリストで投げても誰からも何にもないし。教育に興味ないひともいると思うけど、なにこれって思う。共有のために、みんなわざわざ時間をかけてメールで流してるのに、まず読んでるのかもわからへんし、読んでたとしたら教育には興味なくても臨床哲学に興味をもって関わっているんなら、おもろいって思えるポイントってあると思う。

確かに、今年度の報告の勢いはすごいですよね。ミーティングの報告まで出してくれるとは思いませんでした。ミーティングや授業に参加できないので、すごく参考になってありがたいですよ、と言ってみたときに、これってみんなのリアリティなんだろうか、と引っかかる。他の方は、このことについてはどう思いますか、とふってみると、桂さんへの質問から話が進む。

研究室が閉じてるってこと？—– 閉じてるんやったらかわいいんやけど、人がおらへん。—– 肩に手をおきたい……肩がない！っていうかんじですね。—– 虚空に向かってしゃべってる気がしてくることはありますね。—– おってくれたらそれでいいんやけど。なんかさみしい。—– なるほど、やっぱり周りの人たちの無関心ってリアリティがあるんですね。

そういえば、昨年度に洛星高校の担当者をやっていたとき、同じ悩みに直面していた。情報を共有したい、そして自分の授業がどんなふうに見えるのかを聞きたい。そういうふうに意思表示して、リアクションがなければひどい孤独感を感じる。

そして今、自分が抱えている問題もこの延長線上にある。基本的に、学校の授業はひとりでするもので……そこで起こったことを誰かと共有することが難しい。だから、ひとりで考える。自分の中の皮肉屋が姿を現す。皮肉屋は容赦なく、現実を捉える。彼は言う。つらいならやめてしまえば良いのに。でも、もうひとつの声は、こんな甘いことを言う。そうじゃないだろう、この活動には意味がある。その意味に気づ

いていないだけじゃないのか。

おもろくなる

意味、どこにあるだろうか。それを探しに、ここで、語られる言葉を撮っているのだ。

えー、それじゃあ、次の人、豊泉さんお願いします。——豊泉さんが、洛星高校の授業者に加わることになったのは大阪大学で開講されている授業、対話技法論がきっかけだった。—– 対話技法論で、なんていうか、もう答えが出ているはずなのに、その答えについて質問されることで「分かる」ことがあって、それが気持ちよかったんです。それで洛星に行くようになりました。—– 洛星に行ってみてどんな変化がありましたか。

すごい私的なことなんですけど。親がめっちゃ厳しい人だったんですよ。なに言っても頭ごなしに否定されるっていうか。それであんまり人と話さんくなったんです。自分の言っていることは絶対に理解されへんっていうか。そんなベースがあった中で対話技法論に出て話し合いをしてて、すごい楽しかった。実生活の中で対話ってめっちゃ重要やなって僕は思うんです。

洛星高校での体験が、私的なこととして前置きされた「父と話せないこと」と重ねながら話される。近親者との理解が隠されたストーリーなのだ。—– 対話には技法、ルールがあって、学校で授業をするんやから、そのルールを教えに行くと考えてました。—– でも、ちゃうなって。

洛星に行っている間は、対話の技法を学べば、対話ってできるんじゃないかなって思ってました。でもちゃうなって。お父さんと話し合いがでけへんかったんは、お父さんが対話の技法を知らんかったんじゃなくて、単純に僕が話し合えると思ってた立場がお父さんにとっては全然話し合える立場じゃなかった。対話の場の成立って何なのかなって考え始めました。

対話を実際に行ってみるとは、ただ何かを教えにいくことではない。対話の成立とは互いに話し合える立場をつくることなのだ。

人と人が意見を言うかたちになれば誰でもが対話できるって思ってたんですけど。そうじゃないなって。その人を好きか嫌いかっていうだけで話されへんやんって。そいつのことが嫌いやったら、そういう場があっても話したくないわ、こいつとはって思うし。今は、話したくない人とどうやったら話ができるのかなっていうところに自分の意識が変わった。話している人がおもろかったら、話できるよなって思って。おもろくなるしかないかなって。話すほうがおもろくなったら、聞くほうもちゃんと聞いてくれるかなって。

豊泉さんの変化は、話す条件へと意識が向いたことだ。知らない人へ向けて、知っている人が何かを教えるという教育観から、そうではないところへ。生徒たちが持つ好悪という感情や、語る人がおもろくなることといった、話すものの条件を整えるという見方へと変わっていく。教室で生じるできごとを見る目が変わった。そしておそらく、この変化は豊泉さんの語った、父との対話へのひとつの姿勢なのだろう、あるいは。

そして、この語りを聞いたことで、孤独がひとつ去った。自分の考えていたことが明らかになる感覚を信じて、対話の授業を繰り返してきた。その魅力を語る人が現れた。自分一人ではなかった。そのことが、心を暖める。

シークワーシャーとほっぺたと

今年度に初めて洛星高校の授業を訪れた山本さんは初めての授業が自分には向いてないと思った。―– たぶん生徒がこう言いたいんやろなってことを授業をしに来ている人たちが誰も何も言わない。もっとこう言ったらいいのにっていうのが気持ち悪くて、この授業で何がしたいのかが分からなかった。―– それで、山本さんはしばらく洛星高校には行かなかった。そんな彼が久々に訪れた授業で「シークワーシャージュースは新しいか」が議論されていた。

シークワーシャーの授業が純粋に参加者として面白かった。教える側とかそういうのを抜きにして面白かった。面白いっていう感覚は、こいつこれが分からんかったんやっていうのが、教える側も教えられてる側もわかる瞬間っていうのがあって、それがすげー気持ちいい。このことを経験した後、この子が何を言いたいのかを見るようになった。そのことに真剣に向き合えるようになった。

―– その感覚よくわかります。なぜかは分からないんですが、現代文の授業をしていてもたまにそういう経験をしますね。あの瞬間は何ものにも代え難い。対話の授業でも同じで、みんなが話されている論点の大事さがはっと分かる瞬間があって、その瞬間を味わいたいがために、授業をしてるようなもんですよ。―– ついつい、カメラを持つ手に力が入る。そして、またひとつ、共感することができ、孤独は去っていく。

他の人たちに質問です。これから、やってみたいことってありますか？―– その場で何を話したいのかを出して、それを続けていくことをやってみたいです。先生のほうが生徒のほうにインクルードされていくっていう体験をしてみたい。

この言葉を聞いて、カメラを撮りながら、ある日の授業を思い出していた……

「なぜほっぺたは赤くなるのか」。笑い声がおこる。どうやら、発言した子はよくほっぺたが赤くなって、周りから冷やかされるらしい。「先生、今日はこれでいきましょう！」うーん、この問いで何について話せるんやろか。まぁでも、やりたいのなら、やってみようか。

「いっつもエロいこと考えてるからやろー。」やっぱり冷やかしか。さーて、この空気をどうしたらいいもんか、と考えながらしばらく観察していた。あいかわらず、エローイとか言いながら数名がふざけあっている。何かが引っかかったのか、発言する人が。「でも、ほんまになんでほっぺたって赤くなるんやろ？」真剣な調子で繰り返す。

空気が変わった。「せやなー、まず、どんな時にほっぺたって赤くなる？」と試しに尋ねてみる。「恥ずかしくなったとき！」「失敗して動揺したとき！」「好きな人が近くにいるとき！」―– 心の状態が顔に出るってことなんかな？―– でも、なんで心が出ちゃうんかな。それって隠しときたいもので、動物としては劣ってるよね。―– 心と体はつながってて、だから、不利な感情も人に伝えてしまうんやと思う。―– 隠すことができるときもあるから、やっぱり心と体はつながってないとおれは思うけど。

デカルトさんの登場か、とぼんやり考えていたらチャイムが鳴った。心と体の関係か、おもろいな、まさかほっぺたからここまで辿り着くとは、とつぶやきながら職員室に戻る……。

カメラを構えながら、少し饒舌にしゃべってしまう。―– 生徒の側から出た意見を授業でそのまま扱って、失敗する時もあるけど、うまくいったときのクラスの盛り上がり方はなかなかですよ。ぜひ、来年度から、積極的に試してみてくださいねー。―– 自分の経験から誰かにアドバイスする。

このことでまた一段と孤独は薄れる。

皮肉屋

カメラを片付けかけた時に、またまた例の奴が声をかけてくる、でも。

ところで、そろそろ授業をやめてしまう覚悟はできたかい？―– 残念ながら、君の皮肉の出番はなくなったみたいだぜ。さいなら。

年度をまたいで慌ただしい編集となってしまいましたが、無事に復刊後２号目を刊行することができました。今回は阪大のみならず、ALS 合宿でご一緒した立正大学や湘南工科大学の方にもタイトなスケジュールのなか執筆のご協力をいただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。私事ですが、春から埼玉で言語聴覚士になるため修行中です。「現場で／と考える」ことをじっくり考えながら学んでいきたいなと思います。（楠本瑶子）

無事、復刊二号目を出すことが出来ました。年度末の忙しい時期に校正作業にご協力いただいた執筆者のみなさまに、この場を借りてお礼申し上げます。今後のメチエでも、Web と連携する試みなど、さまざまな形で臨床哲学の活動の発信とアーカイブの方法を模索していきたいと思っています。

（きむふぁよん）

足早に過ぎ去ろうとする日常の隙間に、創造的なスペースが垣間見えることがあります。感覚的にしか語れませんが、それはほんの一瞬の出来事で、あっという間に消え去ってしまうものなのかも知れません。私はそのスペースが生まれた記録を書き留めておきたい。本誌がその一助となることを切望しています。（辻明典）

今回の『メチエ』は臨床哲学研究室に属さない方にも執筆・参加していただくことができました。「臨床の知のネットワークのために」ささやかにでも貢献できていれば、と祈ります。一人で書くことだけでなく、多くの人数で話し合ったものを文字にすることにも挑戦してみました。臨床哲学の文体、そして臨床哲学のメディアについての実験の場所（あるいは「遊び場」）として、今後も冒険を続けていくつもりです。ご期待ください。（川崎唯史）